慈光

第二十六巻　第二号

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十九年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二九七号）

目次

実生活と真宗教……近角常観……(1)
悲歎述懐和讃……福島政雄……(6)
一道会の記……榊原徳草……(10)
人生の彼岸……山本普道……(15)
念仏詩抄……木村無相……(19)
親鸞聖人の常持語(二)……花田正夫……(22)

実生活と真宗教

世間虚仮、唯仏是真

近角常観

実生活という標題を掲げるときは、人は直にこれをつかまんと欲するのである、すなわち生きんと欲し、努力せんと試みるのである。しかるに実生活はかえって生きんとして生くる能わず、努力せんとして努力する能わず、かえって人生は皆虚仮なるものなることを知りて、その虚仮を見捨てたまわぬ御恵みが唯一仏陀の真実なることを信じたるときに、実生活が生じ来るのである。

聖徳太子の御遺訓が、世間虚仮、唯仏是真ということを仰せられたということは、天寿国曼陀羅の銘に書いてあるのである。如何にも穢土（えど）をすてて真実真如の仏の御国にお帰りなさるときの遺訓として、実に我等骨髄に徹する仰せである。しかしこれが一代四十九年の間、政治、文学、美術、慈善、すべて世間的経営の実生活を貫きてお仂き下された御精神なることを忘れてはならぬ。

全体、実人生と真信仰ということにつきて大いに着眼せねばならぬ二個の点がある。一は今日の時代精神、もしくは近代思想なるものと仏教とは、根本的にその立脚地を異にすることである。

何時の時代にしても我等人間の立場としては、我等の生活を真実なるものとして肯定せんとするは凡夫の常である、ことに近代思想においては、大いに人生を肯定して生きんとし、努力せんとし、真実なるものとし、実在なるものとせんと試みつつあるのである。

しかるに仏法の根本義は人生は無常である、諸法は無我である、我等は煩悩具足である、世界は火宅無常である、結局消極である。

これ根本において東西方角を異にする如く、黒白色を異にするが如く、全然立場を別にすることを注意せねばならない。

かくの如く全然消極とすれば、如何にしてこの虚仮不実の人生が救済せられ得るか、これが第二の着眼点である。曰く、人生世間の虚仮なることと、仏陀救済の真実なることとの関係である。

世間虚仮、唯仏是真といい、又煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますといえば、直に世間と仏法とを、黒白清濁をならべたるが如くに感じやすいのである、世間を捨てて仏法に入る様に考えられるのである。かく云えば何とやらん遁世、隠遁、出家発心、捨家棄欲であらねばならぬように考えるのである。

いかにも世間は黒に違いない、しかれども仏法の白はこれと相対的に相ならびたる白ではない。その世間の黒をして遂に白ならしむるまでの白である。煩悩は濁に違いないしかれどもその濁に対立しつつある清の仏法ではない、如何なる濁れる煩悩の水もへだてなく、飽くまで清めてしまう清らかなる弥陀の清水である。

本願力に遇いぬれば　むなしくすぐる人ぞなき
功徳の法海みちみちて煩悩の濁水へだてなし

である。

不断煩悩得涅槃といい出家発心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せずというのが、黒を飽くまで白からしめ、濁を飽くまで清からしむる本願他力真宗の真面目である。

白からしむるとか、清からしむるといえば、煩悩を断じたり、心を清くすることのようにきこえるが左様ではない。むしろ煩悩を断じ得ざる悪しきこころを飽くまで見捨てたまわぬ大悲心である、不真実、不清浄なる我等を哀愍摂受したまう如来の真実清浄の御心である、これを白といい清というたのである。

近頃多く青年求道者にお話するときに、求道者の予想とお話する我等との心のくいちがう点を明瞭することが出来た。誰も人生において、無常とか、不実とか、不浄とかを感じたるとき、これを自己そのものに帰することを忘れてこれと引きかえに、常住、真実、清浄を求める人が多い、そこでこの如き仏陀の存在を疑うという結論に達することになる。

宗教は飽くまで自己の救済である、個人の自覚である、我身の悟りである、我生の救いである。故に人生の無常と云うか、不実と云うか、これを自己の上に感ぜねば何ともならぬ。如何に他人が老病死があろうが、釈尊がこれを自己の上に観ぜられなんだならば、国を捨て城を出られることはなかろう。

そのように、人生が冷かであるか、世間が暗黒であるとかいうときに、いたずらに他人の冷酷のことや、世人の暗黒面のみを見て、我身の冷酷なること、暗黒なることに気付かぬものが多い。

若し極端に言わしめると、他人を冷酷なりと評するは、その裏に、我身は親切なりと誇りつつあるのである、世人は暗黒なりというは、我身は光明ありという換言と見てもよい。

されば一歩ゆるして、夫程親切なるわが身でも、他人の冷酷に接するときは、自己も冷酷になるではないか、それほど光明なる自己でも、世人の暗黒に接するときはまた暗黒になるではないか。否、今日まで親切である、光明があると思うていたは、畢竟他人の親切、光明を予期した条件附の親切、光明であって、この如きものはむしろ相対的、報償的なる、すこぶる不真実、不清浄なる名聞利養にすぎないことになる。して見れば、結局最後の問題としては、自己が虚仮である、不真実である、不清浄であるという問題になるのである。

善導大師が、観経の深心釈の機の深心を釈して「我身は現にこれ罪悪生死の凡夫」と云われたは、実に千古不磨の大徳音である。人生問題、信仰問題に手を染めるものは、我身は現にこれ罪悪生死の凡夫ということを忘れてはならぬ。

しかし黒ばかりでは黒は知れぬ、濁ばかりでは濁は知れぬ。如来の真実、清浄の清白があらわれねば分からぬ。法に出遇うて機法二種の深心が一度に起るのである。

さればとて如来清白の法と、我等の黒濁の機と対比して自覚するのでない。我等が黒濁を飽くまで哀愍摂取したまう清白のお慈悲である。我等が人生世間の冷酷なるに冷却せしめられて、また冷酷となれるを悲憐したまいて、その冷酷をあたためずんば止めぬという大慈大悲が、如来の超世稀有の大願である。

親切なれば迎えられ、冷酷なれば却けらるるが世の常なるに、かく冷却し了せるを憐みて、冷酷なる程見捨てられぬというが救済の本意である。超世稀有の正法と名付けられる所以である。

ここに到れば、大経の異訳の如来会の文を想い起さしむるものがある。曰く「彼国の衆生、若しくはまさに生まるべき者、皆ことごとく無上菩提を究竟し、涅槃の処に到らしめん、何をもっての故に、若し邪定聚、および不定聚は、彼の因を建立せることを了知すること能わざるが故に」と。

如来は何を以て彼の因を建立したまえる。南無阿弥陀仏の念仏は、破戒、無戒、愚痴、無智、少聞少見、罪業深重にして、何れの行もおよびがたき衆生のためにすでに建立したまえる大行なり、これ彼の因を建立したまえる所以なり。

その罪悪の衆生とは他人ならず、我身一人にあらずや、聖人の常の御述懐に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」とあるも、つまり我身一人の罪悪のために建立したまえる念仏なり。

ああ何たる恩徳ぞや、何たる大悲ぞや、実に不思議なり、仏智不思議なり。和讃に曰く、

不思議の仏智を信ずるを　報土の因としたまえり
信心の正因うることは　難きがなかになお難し

と。

この如く罪悪深重の無明の大夜をあわれみてあらわれたまいし尽十方無碍光仏にてまします。具縛（ぐばく）の凡愚、屠沽（とこ）の下類、如何なるものといえども、刹那に救済したまう名号なり、光明なり、誓願なり、仏智なり、仏智不思議なり、誓願不思議なり、名号不思議なり、不可思議光なり、西方不可思議尊なり。

全体、何人も人生の消極方面は事実としてこれを感ぜざるものなけれども、如上の如くその暗黒をすべて救済したまえる大光明、大誓願の大積極を得ることが難しいのである、極難信といい、難中之難というがこれである。

法然上人は我等は菩提心をおこす能わぬ、と云われた、而して親鸞聖人は信心は浄土の大菩提心なりと云われてある。

法然上人は諸善念仏対比して廻向不廻向と云われた、親鸞聖人は念仏を如来廻向の大行と言われた。

法然上人は破戒無戒のもののための念仏と言われた、親

鸞聖人は一生之間能く荘厳して臨終に引導して極楽に生ぜしむるの信仰的家庭を実現された。

法然上人は五遍まで一代経をひもとかれたけれども、選択集には三経一論を選択し、善導一師によられた。親鸞聖人は教行信証に一代経を皆如来真実の顕現なりとして、往生之業、念仏為本（いほん）の一句より三朝浄土の宗師の真宗興行を仰がれた。

以上のように、法然上人の消極は親鸞聖人の積極によりてあらわれた。法然上人の一向専修の念仏が、親鸞聖人の本願他力真宗となったのである。

これが虚仮不実の人生を哀愍摂受したまう唯一の如来の清浄真実にてまします。これあたかも三心釈の聖人の文点に「一切衆生の身口意の所修の解行、必ず真実心中に作（な）したまいしをもちいんことを明かさんとおもう、外に賢善精進の相を現ずることを現ざれ、内に虚仮を懐けばなり」の真意である。しかして聖徳太子の世間虚仮、唯仏是真の遺訓と全く同意である。これ親鸞聖人が、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしまず、との金言と、前聖後賢符節（ふせつ）を合せたるが如しである、これ念仏成仏是真宗の真髄である。

任田智見師語録

歎異抄は戒律主義を破って強く信を勧め、御一代聞書は信より出る無戒の戒を御教化である。

○

「夫れ三宝によらずんば何によりてか枉（まが）れるを直さん」と太子の申されたは、仏心を受けると光明に照らされて足許が見えるにより、内省を深めて行くからそう仰せられたのである。

○

安芸の弥平は麹（こうじ）を計りつつ「見てござる、見てござる」と云って念仏しながら商売をした。

○

本願に向う出発点は苦である。今現に体験しつつある苦で、苦は無量である。この苦を焼きつくす火が本願である

○

念仏のいわれが仏のまこと、そのまことを信ずるが無上涅槃の因。仏智不思議を知らぬものが、念仏の数の多少をいうことになる。

数を目的にする者は称える口に目をつける。が仏の誠に目をつけぬと落着けぬ。

◇　◇

悲歎述懐和讃

福島政雄

誰でも青年時代には一度は純真な心持を起すものであります。煩悩も新しいものが起って来ますが、その煩悩の起るのに相ともなって純真な求道の心が起って来ます。これを総括して青年性というのでありますが、むかしからの精神的偉人にはこの青年性が一生のうちに幾度か回帰して来ているのであります。

普通の人であれば青年性は一生に一度青年時代に起って来るばかりで、それから後は年令の増すにしたがって青年性は影をひそめ、心持があつかましくなって、自分の罪悪煩悩をも自覚せず、いわゆるすれっからしになって行くのでありまして、老年期に入ってこのような状態になっている者は全く手もつけられぬ、あつかましい不純な人間であります。然るに我が聖人の晩年を見ますれば、全くこれに反対でありまして、八十幾歳になってもその青年性を鮮かに保持しておいでになるのであります。それが何にあらわれているかと言えば、愚禿悲歎述懐和讃に最もよくあらわれているのであります。

一体に聖人に愚禿の御自覚が起ったのはいつの頃からと言えば、それは越後時代からであると思われます。善信という僧名を藤井善信という俗名にあらためさせられて、越後に御流適になられてからの聖人は、御自身をはじめて愚禿と仰せられています。

それは愚かなる禿人というので非僧非俗のお姿をいうと言われていますけれども、聖人のおこころでは、涅槃経に述べられてある禿人という意味で、聖道の修行も出来ないで、衣食のために僧侶のような姿をしている、似而非の僧侶であるという厳粛な御自省の上から愚禿と仰せられたものと察せられます。その愚禿の御自覚が晩年の聖人にはさらに鮮かに痛切になっていることが、悲歎述懐和讃にあらわれています。これはまさに八十歳における青年性の回帰ともいうべきもので、人類の精神史上にたぐいまれなことであると思われるのであります。

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし
外儀のすがたはひとごとに賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪偽おおきゆえ　奸詐ももはし身にみてり
悪性さらにやめがたし　こころは蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆえに　虚仮の行とぞなづけたる
無慚無愧のこの身にて　まことの心はなけれども
弥陀の廻向の御名なれば　功徳は十方にみちたまう

悲歎述懐の最初のこの四首が非常に痛切でありまして、心打たれるものがあります。これは前の正像末和讃に歌われているのとは全く反対のようにも感ぜられますが、実は一つに通うものであります。ただ今は聖人が痛烈に御自分の心のすがたを見ておいでになるのであります。

教行信証の信の巻の、至心、信楽、欲生の三心釈にもこれと同様のことがありますけれども、あれは善導大師の言葉をひいていられるのであります。然るにこれは聖人御自身のそのままの姿を直視して述べておいでになる。そこには直に人の心にせまるものがあるのであります。

これは聖人の煩悩が八十歳になってまた烈しく起って来たというようなことではありません。如来の悲願をいよいよ深く感ぜられるにつけて、御自身の煩悩の姿がますますはっきりとなったのであります。ことに老年に入られてからは承元の法難以来の世の中の思想の乱れの有様がまざまざと聖人の心眼に映じて来たに相違ありません。その乱れをことごとく御自分のこととして歎じておいでになりますそれにつけても

小慈小悲もなき身にて　有情利益はおもうまじ
如来の願船いまさずば　苦海をいかでかわたるべき

と深く悲しまれながらもなお如来の願船をたのみにしておいでになります。

「有情利益はおもうまじ」という言葉のかげには、一切の衆生が何とかならないものかという悲願をもっていられます。

「功徳は十方にみちたまう」というのは、如来の悲願の功徳が十方にみちたまうのであって、正像末知讃の「利益有情はきわもなし」というお心持とあい応ずるものであります。

とにかく晩年の聖人の青年性の鮮かな仂きが如来の悲願に値遇するという常にあらたな感じが続いているのでありまして、そこには現実の世間の不徹底な迷信なども問題とせられているのであります。

五濁増のしるしには　この世の道俗ことごとく
外儀は仏教のすがたにて　内心外道を帰敬せり

かなしきかなや道俗の　良日吉日えらばしめ
天神地祇をあがめつつ　ト占祭祀つとめとす

外面は仏教のようで内心では外道を帰敬するというのは祈祷などを事とする寺院の仏教はすべてそうであるということになります。良日、吉日をえらぶというのも迷信の行いであります。天神地祇をあがめるというのも自分の欲の満足など思うてあがめている限り迷信であります。宗教家も俗人も迷信におちいっていることを悲しまれるのであります。

聖人の御信仰の上では人生の行路のことすべてを如来にまかせ奉るということでありますから、もちろん卜占（ぼくせん）などの行いをも離れて、何物にも心を囚われずに悠々として歩んでおいでになります。ただ世間を御覧になると迷信のことばかりが多く行われている、それがことごとく貪欲の煩悩のために行われている、この煩悩は聖人も持っておいでになる、ここにこの迷信的な世界の姿が聖人御自身の問題ともなるのであります。

吉日、良辰をえらばず、加持祈祷を事としないけれどもかようなことを呼びおこす貪欲の煩悩が聖人にもある、ただ聖人においては、それが融かされ流されて、功徳は十方に満ちたまうということになる、世間のことを御自分の問題としながらも迷信を離れた悠々たる聖人のあゆみはかわりはないのであります。

鬼神ということも教行信証においても問題とせられていることを前に述べましたが、悲歎述懐においては、一切の鬼神をあがめ、天地の鬼神を尊敬すること、道俗共に然りといって歎ぜられています。

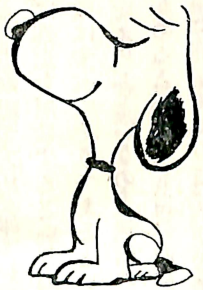
魂神はこの人生に災厄をもたらすものと迷信せられていますが、聖人はその晩年に、過去幾十年の御生活をかへりみて、すこしも魂神のあとを御覧にならないのであります

聖人も承元の法難をはじめとして随分災厄におあいになっています。しかし晩年に過去をふりかえって災厄の上にも常に如来の慈光を感じておいでになります。それは現世利益和讃に聖人の御心持がハッキリとあらわれているのでありまして、南無阿弥陀仏の信仰の上においては如何なる災難も災難でなくなり、三世の重障も転じて軽微となり、流輪輪廻の罪も消え、諸天善神は昼夜に念仏者をまもり、大魔王も天神地祇もことごとく善魂神となって信仰の人をまもるということをハッキリと歌っておいでになります。天地にみてる悪魂神も皆ことごとく願力不思議の信心をおそれるといっていられます。

これは非常にハッキリとした信仰の上のお心持でありまして、南無阿弥陀仏によって災難をなくするということではなく、如何なる災難も念仏者の上には災厄として続くこ

とがない災難が問題にならず災厄にあっても無いに等しいことになるという深い信仰であります。聖人は二十九歳以後のあらゆる厄難をも念仏のうちに融かされて、転悪成善ということを体験しておいでになります。そこに晩年の聖人の博大の心境が開かれているのであります。

要するに、聖人の御和讃は浄土の音楽のひびきに感応しているものでありますから、現世の、俗世間の尺度ではかろうとすればまちがいになるのであります。聖人は浄土の音楽にあわせて晩年には常に御和讃を口誦んでおいでになったと思われます。現世の現実は徹底的にお見とおしになりながら、浄土の音楽にあわせて和讃を口誦まれるというところに聖人の晩年のお姿があり、そのお姿を十分に拝するということはなかなかむつかしいのであります。



聖徳太子讃詠

福島政雄

とこしえの無上の浄土（くに）に聖徳の皇子（みこ）の御いのち生きてまします

悲しみのことある毎に国民は聖徳王を恋ひ仰ぎけり

聖徳の皇子のいのちはとこしへに我が国民を生かしましけり

虚仮（こけ）の世に仏のまこと身にしめて聖徳王は生きたまひけり

御子大兄（おほえ）みをしへまもり身を捨てて国のいしずえかためましけり

とこしへに国のいのちと仰ぎまつる聖徳王の御おしへたふとき

昭和三十三年九月十七日

◇　◇　◇

一道会の記

榊原徳草

本年の一道会は、この八月二十五日に白井成允先生がお亡くなりになり、案内状にも池山先生ならびに白井先生の追憶の会とする旨を誌しました。天気予報は昨日から今日にかけて雨とあったが、今日は朝方から少雨となり午前の大半は霧雨くらいで先づ安心という所であった。

かねてから白井先生の御遺族に、先生の御遺骨の一分を名号碑に納骨して頂きたいとお願いしておったがお聴許下さって、今日の会の最初にその納骨式を勤めさせて頂き、十二時三十分御遺族の奉持された御遺骨をお納めして、読経、焼香、しめやかに式を執り行ったのであった。

名号碑は先生が散歩によく参られたところであり、又「一心正念直来」〈オネガヒダカラスグキテオクレヨ〉の池山先生の御在訓に感銘された碑裏の文字も鮮かであるが、両師は今ここに御浄土への入口となり、永く慈光を放って下さる光源となられたのである。

花田先生は御夫妻でお参会、一期一会をひしひしと感じるこの頃とお便りがあったが無事をありがたく嬉しいことであった。松本先生も四国高松から年に一度の待ちに待った参会であった。井上善右衛門先生は今年は特にお願いして白井先生の追憶のお話をお願いし、喜んで御出席下さった。又東京の理科大学の日下部智先生は白井先生との深い仏縁により馳せ参じて下さった。向島、西元の両先生はお都合悪しく、川畑先生は北米巡講中で欠席であった。又欠席の方々から御供花料も送って下さった。

誠に池山先生、白井先生お二人のお念仏大悲の光りは此所浄住寺の書院に満ち溢れるだかりであった。

一時十分から阿弥陀経読誦、歎異抄拝読、その間諸兄姉のお焼香があり、続いて白井先生の昨年の御法話の録音を拝聴し、ありし日の先生をおしのび申し上げました。そして追憶のお話が**井上先生**から開始され、その大要を次に記します。

今日は池山先生の追憶の会ですが、かねて白井先生の追憶の会としたいとの仰せで感慨に満ちることであります。毎年十月最後の日曜日の一道会に参らせて頂きますと白井先生が御出席されまして、さあ何年頃からご出席になりましたか、京都に住まわれて二十年になりますが……。恐らく今日お集りの皆様はいつも彼所に先生がお坐りになっておられたお姿を思い起される事でありましょう。

先生は今年の八月二十五日におかくれになり、二十七日に京都のお宅で密葬という形で告別式がありました。それから十月八日に御郷里の盛岡市の願教寺さんで御本葬が営まれ、遠方ですので私が関係者を代表して参列しました。

その帰途、十月十一日に先生の御本家の千葉の現在は茂原市、昔は七渡りという庄屋さんのお宅で、私もかねて白井先生から一度一緒に訪ねようかと仰言って頂いたことがありましたが、その機会もなく、この度奇しくも先生のお骨を捧じて御本家に分骨される機会にお伴する結果になりました。

九十九里浜から約一里半、その西に当る所ですが、森に囲まれた村、特に御本家は広大なお宅で千坪程ありましょうか、ぐるりは堀を巡らし背後に森が囲むようにお屋敷を囲んでおります。そういう所で先生のお父様がお生れになったのですが、安房の国は日蓮上人の誕生地が近い関係もあり殆んど日蓮宗で、先生の御本家も日蓮宗でした。先生の御尊父は漢学者であり且つ国学者でありましたから、儒教と神道というのが建前というか、生涯を貫かれた道であったようです。そういう家庭で生長された先生の御心の中に、聖人君子の道を通して人格を完成するという、それが生涯を貫かれる生命の指針と申すか、先生の御一生を貫いたようであります。それは先生の生れた御縁の然らしめる所と思いますが、そういう先生が辿り辿って精神的遍歴の末に、南無阿弥陀仏の世界に到達なすったという事は、私共人間の精神の旅路、私共人間の生命の道行きといたしましては、非常に意味深いものを感じるのであります。ですから先生がお念仏に辿りつかれた過程には人格の実現、完成が、それはいつも先生のお口から、何のために生きるか、如何に生きるかという自身への問いかけとして、先程の先生の昨年の録音の中にもそういう言葉がありましたが、そういう所に先生の人となりと、先生独特と云ひますか、親鸞聖人の御いのちを受取られる素地というものが、一貫するものがあったと感じるのであります。

先生が二高から京城大学に赴任されたのが昭和二年で、昭和三年に御家族を神戸に移されて単身朝鮮へお出でになりました。昭和四年から五年終りまでドイツに留学され、六年の秋に御家族を朝鮮へ移されました。そういう御縁で

神戸に先生が家庭をもっておられたという一つの御縁が、当時私は神戸高商に学んでおり、先生の親友の佐々木円梁先生が教授であったことから白井先生に巡り合う機縁が開かれてまいりました。

私の記憶では入学前にお出合いしたのですが、その時はチラッと垣間記たという程度でした。それにしても昭和三年から四十五年間、お育てを蒙りましたが、何から申していいやら色々と思出が群り湧いて参ります。昨日昼頃「慈光」が送られて拝見しますと、白井先生の信の歴程と申すかそういういきさつを適確にお書き下さっております。内容については慈光をご覧頂きたいと思います。

白井先生は十歳の時にお母様を亡くされた、まあ、親鸞聖人にお出会いなさる必然的な導きを、亡くなられたお母さんがなさったとでも申しましょうか、そういう感じがいたします。

でお母様は先生の弟様をお産みになって、その日に亡くなって居られる、そのお病状は分りませんが、お産の時のお病気だったんです。お産と同時に亡くなられた、そういう出来事が突発したのです。そして小学校四年生、漸やく少年の時期にお父様が盛岡に職を得られて単身去って行かれた。先生は故郷の七渡りの本家に預けられて、そこから本能という約一里先きの小学校へ通われる。先日その地に参りまして、そのあたりは昔も今も様子が余り変らないという感じがしましたが、静寂さが残っている田園で、先生がそこを通学されたのを偲びました。その学校に通学の何処の出来ごとか知りませんが、私共の子供の時にあったあの覗き眼鏡という、上で歌を唄って下に窓があって覗く、絵が次々替って物語が展開される。先生の友達がそれを見ている間、恐らく先生はそこで待っていたらしい。その友達が見てきて云うのに、お産で死んだ者は血の池地獄へ行くんだと、そんな地獄極楽の覗きだったんでしょうが、それがショックになって、先生の胸に響いた。その後ずうと忘れられたようになっていたが、仙台の二高に行くようになって、又先生の胸に襲いかかるように浮かんだ。亡き母はどうなっているだろうという、先生に忘れ得ない大きな問題となっていたと思うのです。

今度御家族の方が色々整理されておると、矢張りお母様の日記が出てきたそうです。その中に先生が四五歳の頃病気をされた時の記事が載っているそうですが、先生は生前よく言われましたが、漸やく記憶が始まる頃、病気をしてお母様に抱かれて、あやされながら、廊下か何かを歩いておられる。その時お母さんが「お前が亡くなったら、むしろ一緒に母も死んでゆく」と、そういうことを言われたそうです。そのお母さんが十歳の時突如として亡くなられ

た、そしてお産で亡くなったは者は血の池地獄へ行くと友達が言った。そういうことが、先生の心の中に恐らく一時も忘れられない事柄となって焼きついて居られたことは間違いない事実と思います。

花田先生がお書きになったものの中にもその事が出ておりますが、最初キリストの教を聞かれた時も、キリスト教では自分の母がどうなるかの問題となると、神を信じない者は煉獄に堕ちるというより外に帰するところはない。そのことが先生の胸に大きな波紋を投げたようであります。

それで第二高等学校の頃、先生の求めておったキリストの信は崩れましたが、三好愛吉という教授が居られて、この方は禅の人と承っておりますが、先生に「君のような人は親鸞聖人の教を聞くがよい」と勧められたというのです私はそういうことを聞きますと、三好先生の心の広さというか、大きな人格を偲ばれるのですが、そのお勧めで近角常観先生をお訪ずねになられたのです。

そこで「歎異抄」をお読みになり、五章に「急いで浄土のさとりを開いて思うがごとく有縁を度すべきなり」という浄土の慈悲に新しい光明を見出されたのであります。

ところが先生の胸の中に、解ったようでわからないものが残存して自分の心を覆い続ける。それは先生の「人格の完成」という角度から、御自身の不真面目ということが、自分の心に阿弥陀仏の御心を覆うて、そのお光りを受け容れない、ここに大きな悩みに遭遇されました。

それで近角先生に「自分の不真面目のために解ったようでわからない、そういう雲霧が心から拭われません」と訴えられた。これは先生が始終話されたことで、先生から「親しくお聞きになった方も多いと思いますが、その時近角先生が畳をたたいてニジリ寄ってこられて叱咤するように言われた。「真面目になって仏様のお心がとらえられると思っているかしらぬが、一体そんなことを誰が話したか。すでに永い間自分の話を聞いていると云われるが、私が一度でもそんなことを言ったことがあるか」と詰め寄られたという。その時に、恐らく先生に大きな転機というか、その不真面目でしかあり得ない者がいかにして人間の所期するいのちの目標に到達できるかという、新しい道にお気付きになられたのでありましょう。

ところがもう一つ続いて先生の胸に、阿弥陀仏の慈悲というものが、私共の努力精進で受取るのでなく、どこまで行っても闇を拭うことのできないその者を、どこどこまでも悲しみ、やる瀬なく思って下さるお慈悲というものに気付かれたのでありましょうか。これも近角先生のお話であったそうですが、跛（びっこ）の娘が友達からからかわれて悲泣した、ところがお母さんがとんで来て、その片輪の

娘を抱き取って下さる。するとその娘は他のことはどうあろうともお母さんの心一つで腹ふくれて最早今までの歎きは何処かへ忘れて終う。そういうお話を聞かれ、不真面目であり、それでしかあり得ない者を抱き取り給うその大悲心に気付かれたのでございましょう。

それを島地大等先生に話された時、何かその時大等先生は今迄お見せにならない淋しそうな浮かぬ顔をされたそうです。それから暫くして白井先生に前田慧雲和上の所へ行って来いと仰言った。大正六年九月三十日のことで、それは前田和上の日記に「白井成允子来る」とある。その前後の所を見ると、島地君とか高楠君とか菅瀬君などと出ておりますが白井先生には君でなく子と書いてある。何か当時の先生は前田和上に対する愛しい教え子、そんな気持が文字に滲んでおる感がするのであります。その日十二時すぎに暴風雨となり家が壊れ庭木が倒れたことも日記にあります。そういう暴風雨の前に、前田和上から「ただ単に仏様のお慈悲に感謝する耽溺するだけが信心ではない、聖人の御教は浄土のさとりということをぬいて何もないのだ、私共の様な者を浄土のさとりの中に導く教なのだ」と淳々とお話し下さった。その後、何のための浄土かということを浄土の荘厳について眼前に拝するように近角先生は仙台で死を前にされた針生さんに話されたと云われます。その時に、近角先生のお慈悲のお話と前田和上の往生浄土というお心が裏と表との一つのお心であったことを知らされ新しい感激を覚えたと白井先生は話されました。そのところは慈光誌で順序を追うて花田先生が綿密にお書き下さっております。

（未完）

道を聞く魂より

白井成允

望の月くまなく照りて天地にみおやほとけの御名ひびくなり

浄きみくにうち建てましし弥陀仏の本つ誓ひをおろがみまつる

弥陀仏のもとつちかいをわがために告げたまひにしよきひとたふと

弥陀仏のおほきめぐみを国のうちと　くまなくつげんさらばはらから

人生の彼岸

山本晋道

まえがき

これは私のかねてお敬い申している或る先生（医師）がそのお子様に送られたお手紙である。世の中の親も子も此の問題に悩まぬものは稀である。しかしその悩みの正しい解決は、何のための学問か、何のために生きているのか、という人生の根本問題にまでさかのぼらねば結局完全には解決する筈はない。万人は人生の目的如何という謎には気がつかずに、ただいたずらに目前のことばかりにとらわれてあたら一生涯を浪費してしまうのである。

この手紙は、先ず私自身に、そして六人の子の父としての私に、深刻な反省を促して下さった。他の方々にとっても同じであろうと思う。又、前途の方針に悩む青年達にとっては、この一文はこよなき羅針盤となるであろう。誰よりも私の愛する子供達が、これを頂載して、その人生航路の方向にあやまりなきように切に念じて、これを誌上に留めることをお許し頂いた次第である。

或る父上の手紙

試験が済んで大分疲れたことと思う。入学試験は社会に出る最初の関所であって、人生の悩みのはじまりである。今日にいたるまでいろいろと、いきさつや苦しみがあった様であるが、自分は今日まで黙っておった。それは決して無関心であった訳でなく、不愉快であったためでもない。まわりの人々がしきりにお前に意見を述べていたので、今日までさし控えていたのであった。

そばから何と云っても結局なる様にしかならん、こちらの希望も結局思うようになるものではない。

それに何故まわりの人々は、色々と希望をのべ激励したのか、それは愛すれば、かくあらしめたい、こうしたいといろいろ欲が湧いてくるのである。愛すればこそ盲目的となり、いろいろと愚痴も出ることである。血を分けたものの欲は深刻なものである。その欲に目がくらめばくらむほど悲しみも大きい。自分もお前がああなったら、こうなったらといろいろ夢をみんでもない。しかしそのあとから「夢だ！なるようにしかならないのだ。自分達の願い方に間違いがあるのじゃないか」と考える。能力如何は誰よりも本人自身が一番よく知っているはずだ。それをあえてしているのは欲のためである。五合瓶に無理に一升の水を詰め込もうとしているのだ。五合瓶には五合瓶の役目があり価値がある。これを一升瓶に仕上げようとするのは人間の煩悩である。目薬瓶は余り小さすぎるからとて一升徳利では役にたたぬ。無理算段して一升徳利になっても何の役にもたたない愚さを人間は繰りかえしている。

人生を航海にたとえる。我子を船出させるにあたって誰しも願うことは、何とかして一等船客としてこの娑婆の海を楽に渡してやりたいということである。一等の切符が駄目ならせめて二等なりとと皆があせっている。あの学校を選べ、この学校へ入れとそばから注文が出るのは、このためでしかない。

しかし限りある切符である、幾人かだけ一等が買えるのである。お金があっても能力がなければならないし、この二つがあっても健康が許さねば仕方がない、それにいくらか時の運もあろう。だから是が非でも一等の切符をと皆の人が願うのはおかしい、すこし我慢すれば三等でも行ける。それに何故みな三等を嫌っているのか、乗船の目的が分らないからである。人生は何を目的として船に乗るのであるかということをよく考えたら何もかも氷解してくる。一等船客になるのが大して名誉でもない。水夫であるよりも船長であった方が気持はよいであろう。けれども皆が船長になれるでもなし、又水夫が居なくては船は進めない。だから自分の適材を適所へおくことが何よりである。そして一路船の目的をねらって自分の職分を守りぬく時、三等客であろうと水夫であろうとよろしい、問題は彼岸へ達することだけである。山本先生が仏蹟をたずねて印度へ行かれる時は一等船客であり、帰り路ではデッキパッセンジャー（荷物同様の生活）として帰られた。人生の目的があれば いずれも可なりである風情がしのばれる。人間は船の広間にねそべって美味しいものを食うのが目的ではない。彼岸に達することが最初の願いであり、最後の願いでなければならぬ。

彼岸とは何ぞや。世人の多くはこれが分らないでただ切符を買うことのみを競走している。何処までの切符を買うのかも知らない。これが今日の入学試験の烈しい競走となり、社会の見苦しい就職競走となって現われている。この問題、即ち人生の切符の買い方を教えてくれるのが宗教である、解ったようで中々これが分らない、その解っていないことが今日の社会のあさましい種々相と顕われている。

お前が船に乗込むのに何であろうとよい、自身が一番適所を知っているであろうし、そこに向って差支えない。今日までのお前の学生生活は決して不真面目ではなかった。真面目に勉強するだけはしていた。しかし人の頭には「むき」があり能力に限りがある。不向きの所に無理に行く必要はない。お前に向くところに真面目に考えて乗りこむことであるが、さて行先がきまっているのか、これが問題である。

そのためには今後機会あるごとに山本先生の御法話を聞かねばならぬ、この聞法によって人生の切符の買い方が教えられる、人生最後の目的が決定した時にこの人生が救われたと云うのである。

自分は試験だけはまぐれあたりでパスして来たが、自分の能力の劣っていることは自分自身が一番よく知っておった。それで人の様に社会的名誉を願うことなく人生五十凡々として町医者で暮らして来た、柄にない欲を抱かない代りに大した悲しいこともない。ただ人生最後の目標をねらっている。この目標にそわないものはたえず内心におこって来ながらも結局自分には無駄なものだと知らせて貰える。中学時代から妙に宗教の話に心をひかれた。仏教、キリスト教とむさぼり聞いた。東京に出て近角先生の御法話を聞いて人生の切符の買い方がいくらか思いあたった様である。今日まで多くの善知識のお話を聞いたが、本当に明快に人生の切符の買い方、何処まで行くべきか、という人生最初の問題であり、また人生最後の問題であるこの事について、本当に納得のいく様に説いてくれる人の一人は、山本先生であると断言出来る。山本先生は行先の指定してある切符を持っていられるからである。皆得々として一等船客の切符を買いこんですましているが、よく見ると、行先が指定してない切符ばかりである。航海の終りに近づいてあわて出す連中の多いことである。

昔から芸一代と云う。自分の医業を決してお前が無理して継ぐ必要はない。今お前が希望していることを真面目に勉強して、人生航路に一役つとめねばならぬ。自分の医業は子供が継がなくても自分の医者としての心持を継げる人に継いで貰いたいのがかねての願いである。このささやかな医院が、この地上にいくらかでも存在価値があるなら、きっとその人が受けとってくれるであろう、これが社会へささげる一番いい方法でないかと思っている。

大洋は荒れだして来た。乗組員一同しっかりと、自分の持場を守りぬかねばならぬ時が来た。自分も人生五十の坂を越えて彼岸への到着も間近くなって来た。これから一段と勉強しよう、生活もひきしめよう、聞法に心をこめて行こう。

祖父母達も色々と心配していられる。お前が学校へ入れぬということの悲しみではなく、お前がどんなに淋しい気持でいるであろうかと云う思いやりからであろう。

今お前が希望している学校に通学のために、市中に下宿の問題がおこるであろう。少々の不便は忍んでも千葉の伯母さんのところから通うがよい。便、不便など云うべき時ではない。口にこそ出さね、一日として案じないではいられないまわりの人達へのせめてものつとめであろう。

今は真夜中である。皆ねている。弟もさっきまで勉強していたがもう床に入っているらしい、暗くなっている。母ちゃんは近頃いろいろと思いなやんでいるためか夜は早く眠り込んでいる。だが心は夢路遠く東都をさまよっているであろう。真面目に勉強しよう、無理して健康を害してはならぬ。

四月一日夜半認む　　父より

（編者註）山本師が「人生は結局なるようにしかならぬ」とあるのは、絶望的な宿命論や自暴自棄的な人生感でもない。それは仏教の持つ深い哲理で、最も深くして末通る人生の指導原理である。人生を思うようにならせて行こうとするところに人間の久遠の迷いがある。こちらの思うようには決してならぬ。一人一人の荷っている業はおごそかにその人の行手を決定して何とも外に方法はない。だから人が生きて行く姿に寄りそうて、その人の業道に随順しながら、人生突竟の目的を共に歩む外はない。云々

（私註）明恵上人が「あるべきようにあれ」と提唱せられたことは有名である。カントも「汝があるべきようにあれ」と云っている。桜には桜の花が咲き、梅には梅の花が香る、そこに夫々のところを得しめられる。秋に野辺を飾る七草を思う。キキョウはキキョウの美しさがあり、おみなえしにはおみなえしの楚々としたよさがある、もし七つの花を自分の好むよるにしようとしたならばどうであろうか。

悲しいさが、とは云え、利己の一念に縛られ、奴隷化した私共は、自然を破壊し自らも亡びなければならぬ。独善とか独断の弊害は言うを待たない。最近におこっている東南アジヤの日本排斥は、日本流に考え、経済に物いわせて相手国情を省みなかったことが主原因とも云える。国と国ともそうであるが、個人と個人との間でも大切なことである。正しく物を見る智を正見といい正智という。その眼の開くところに自然に行くべき道はひらかれるのである。

◇　◇　◇

念仏詩抄

木村無相

地獄の中に

自己にめざめよ
地獄のわれに
〃地獄は一定
すみかぞかし――〃

地獄の中に
にょらいあり
地獄の中に
にょらいあり
ナムアミダブツと
呼びたもう
ナムアミダブツと
呼びたもう
ナムアミダブツは
ナムアミダブツは

呼びかけの声
わたしへ如来の
呼びかけの声

呼びかけられて
ナムアミダブツ
呼びかけられて
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

正信偈とは

正信偈とは
正信念仏偈
念仏わすれちゃ
救いにならぬ

助くるぞよの
お声のおうた
正信念仏偈
正信念仏偈

ナンマンダブツ
ナンマンダブツ

われ今ここに

ありがたし
ありがたし
あることかたし
あることかたし
われ今ここに
今あること
われ今ここに
今あること――

天におどり
地におどるほどに
よろこぶべきこと
よろこぶべきこと
われ今ここに

今あること
われ今ここに
今あること――

ああ

ああ――
誓願の山
名号の川
誓願の
山よりながれ
来しみ名に
今にぞ遇いし
ナムアミダブツ

ああ――
誓願の山
名号の川

こころ

こころ
こころ
どこまで
こころぶ
こころんでは

おき
おきては
ころび
こころ
ころころ
どこまでも

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

念仏こそは（一）

如来の家に
生まるるは
ただ念仏の
ほかはなき

極楽こそは
如来の家
念仏こそは
如来の道

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

念仏こそは（二）

歎異抄第四章に
〃念仏もうすのみぞ
末とおりたる
大慈悲心にて
そうろうべき〃
と——

念仏
念仏
念仏こそは
末とおりたる
大慈悲心——

親鸞聖人の常持語（二）

花田正夫

改邪抄三条に覚如上人が聖人の仰せを如信上人から聞きとられて常の御持言には「われは是れ賀古の教信沙弥（しやみ）の定（じよう）なりと云々」ことを専修念仏停廢の時の左遷の勅宣によせましまして、御位署に、愚禿の字をのせらる。これ即ち僧に非ず俗に非ざる儀を表して、教信沙弥の如くなるべしと云々。と、誌されている。

聖人が常に理想の人とせられれ教信沙弥は法然上人より約三百年前の人であって「往生十因」に伝えられる人である。はじめ奈良の興福寺の学僧であったが、学匠碩徳との交りでは、名利に走ることをいとうて、ひとり西に旅を続け、賀古川のほとりの西のひらけた東野口に居をかまえ、本尊もまつらず、聖教も持たず、西方の壁をあけて弥陀の浄土を欣求し、朝夕念仏ばかり申して、傭人となって妻子を養うていたので、世間の人は、念仏丸と呼んでいた。（丸とは飼犬などにつける名であった。）

ところが摂津の勝尾寺で無言の行を十二年間続けていた勝如上人の柴の扉を或夜叩く者があって、そこに教信が現れ「私は今日浄土にかえるが、上人は来年の今月の今日に往生せられる」と告げて姿を消した。不思議に思ってお弟子を賀古川につかわされるとはたして教信は往生していて、その屍を野犬に与えていた。勝如上人はこれを聞いて「十二年の無言の行も教信の口称念仏に及ばなかった」と仰言って、念仏を称えながら教信の予言の通りに往生されたと伝えられる。

さて聖人が教信沙弥を自分のよい手本とされたのは、彼が仏法者、後世者ぶることもなく、学者とか賢者の様子もあらわさず、妻子を蓄えながら念仏ばかり申し申し、日傭人夫を続け、人々から飼犬でも呼ぶに似た念仏丸といわれ、末世の凡夫さながらの生活で本願を仰ぎ念仏された点にあると思われる。

聖人御自身が念仏法難を機として、愚禿と名告られ、また非僧非俗の生活をせられたことは、この常の仰せそのままであった。

こうしたお生活は信心の智慧によって自然に生活にあらわれたもので、聖人御自身のはからいではない。しかも自然法爾（ほうに）にひらけて来たこの御生活のうちに沙弥教信の信の旅姿を発見されて、これある哉、これある哉と随喜されたのであろう。

教信は不僧不俗と云ったが、聖人は非僧非俗と名告られている。いづれにしても、僧として三学もまもれず俗として三福の愛も叶わぬどちらにも救いなしと、僧俗の対立を超えた境界で、俗もよし僧もよしであって、しかも非僧俗に固執するというしこりのない生活である。

仏法者は、出家して僧となり、戒・定・慧の三学をきわめて転迷開悟するのがたてまえであるが、それの出来ない者、その力もない者は教えからもれてしまう。南方の仏教者の現状もそこに限られているから、僧となり得ぬ人々は、僅かに僧に供養して仏縁を蒙むる以上は出られない。これでは特種人は進めるかもしれぬが、老少善悪、男女貴賤の一切の人々の救いとはならない。もし大悲の御手から漏れる人があるならば、衆生無辺誓願度（しゆじようむへんせいがんど）の菩薩の願いも理想に終り、一切衆生を救い遂げんとの弥陀仏の御誓も空文になる。又、私共自身を省みる時、内に八万四千の煩悩を具足し、縁次第ではどうした業さらしをするかも知れぬ身であるから、一切人の織りなす善悪一切の業の中に自分の姿を映し出され、その一人でも救われないとなると、私自身も救いからもれるのである。他の中に自己を見出し、一切人の救われる大悲によって私も救われる、特種人、特種行を条件とする世界では私は絶望の外はない。

沙弥教信と親鸞聖人の辿られた念仏の道は、僧俗をこえた「道俗時衆共同心、唯可信斯高僧説」で、何時でも何処でも何人にも開かれた浄土の大道である。

前回に述べた、例のフランスの青年が「空手をならいに来て、三年間修業したが、善悪をこえた真実心を身につけるには、矢張り僧侶となって修行を積まねばいけないでしよう。一体これからどんな行をしたらよろしいか」と聞くので「聖人の非僧非俗の愚禿の心を話し、真宗に特種な行はないのは一切人の救われる大道であるから。唯ここに紙があって字や絵が書けるように、我々の生活、教師、医師、政治家、実業家、或は母の座、子の座、等々、自分の生活を紙として、そこに聖人の教えが現れることが大切である。あらゆる生活が念仏の道場である、それを軽視して教えを聞くのであれば、空転するだけである。また現在の

自分の生活を真面目にやればそれでよいというものでもない、教えの光がそこにあらわれないと、大きい泡か小さい泡かでやがては空しく消えるばかりである。

○

さて聖人の御生活を省みる時、聖人に三度の出家があった。一つは幼い日の叡山入り、次は廿九才の吉水禅房に入り綽空のち善信と名告られ、次に三十五才の御流罪を期に愚禿を冠せられて親鸞と名告られた。その間出家の出家をせられている。多くの祖師は出家して家をつくりそこに終られているが、聖人は出家して更に寺を出て、家をつくられなかった。御晩年の京都三十年の御生活は、一定の住家も持たれず、有縁のところに移り住まれながら著述を続けられ、たまたま関東から尋ねる同行方に法談をせられた清閑な御くらしで、当時の文献に真宗一派のものを除いては何処にも記録されていない、世間にお立ちにならなかつたし、世間も聖人を認めなかつたようである。教信沙弥の日傭人夫となって〃阿弥陀丸〃と呼称された生活を心から共鳴なされたことであろう。

聖人の御自身の名を地上から消されたことは、聖人が万人の中に入りこまれたことであり、そこに青草人のあらん限り人の子と同塵同化されて不滅の光を世に放たれるのである。

偉い人、賢い人と一代世の名声を得て、死後は消える人もあれば、死後も多くの人々から理想の人と仰がれる者もあるが、万人にとって高根の月で手がとどかない。それに比して聖人は万人と同化、同融されて万人の内から語りかけて下さる方である。

安心小話

源通寺

知道師の臨終に際し、御弟子の一人おたずねして曰く。恐れながら、未来の御覚悟は如何、師曰く。おれに何の覚悟はない。何故なれば、今度は親様につれていただくのじやから、おれに覚悟はない。

○

江州鎌掛村おせぎ、臨末に曰く。

この私は一生涯御教化の裏道ばかり歩いていましたが、今度は仰せばかりで往生さしていただきます。

○

ある厚信の小女の臨終に際し、枕頭の人、嬉しいかとたずねたるに。いいえ、よろこぶどころか苦しいばかりで行く先きはまつくらがりとこたえたれば、それではあぶなかろうといえば、否々という。

それは何故かと問いしに。それでも親様がきつとつれて行ってくださるもの

あとがき

二月は仏陀の涅槃の月また和国の教主聖徳太子の忌月であり、おのずから襟を正さしめられる月であります。

遺教経に「法帰依、自帰依」の遺訓を拝し、太子の常持語に「世間虚仮、唯仏是真」実語をあらたに渇仰申しております。「真実を顕わす」という大事を生涯の使命とせられた親鸞聖人、その大道は時代を越え、国境をこえ、人の力をもって消すことの出来ない不滅の道であります。前聖と後賢が揆を一つにされるところで、是非することの出来ぬ道であります。

この真実なる光は四方を照らし、微塵の中にも入満ちて下さるけれど、自我の殻にこもり、煩悩の重雲に覆われた身には聞くことも見ることも出来ません、唯点滴が岩を穿つように古聖の倦くことのない大悲の慈育によって、月の光で月を仰ぐように、よき人の加威力に促がされて、疑うことの出来ぬ身にさせて下さるのであります。

現代の文化に酔いしれて謙虚さを失う時、はてしのない流転と暗黒がその定めであります。マナルスに登頂した人が「山を征服するなんてもっての外のことです。大自然の前には人間の力などものの数ではありません云々」と述懐していた、これが実践者の声であります。高村光太郎氏が「美の永遠性」を感得した喜びの上から「美は決してキレイなものの中にばかりあるのではない、心して見れば到るところに満ちている」と述べているのも謙虚な目にうつる美の発見であります。

岡山の高等学校時代に、池山栄吉先生から歎異抄のお話をお聞きしたのですが、仏語の真実について或日「君方は前途洋々とした希望にあふれているので、晩年の聖人の物語ともいうべき歎異抄は難解であろう。しかし唯耳だけ借してくれ給え、信仰上の話は決し空しくなることはない。丁度物みなの枯れる秋の野辺も、やがて春の催しをうけて芽を出し枝を出し花を咲かせ実を結ぶように」というようなことを語って下さいました。又「聞法するのは竹子に傷をつけるようなもので、その時は目立たないが竹が大きく成長するとその傷もハッキリと出て来る、何の気なしに聞いていたことが、五年、十年ののちになって、アア聖人はこうした自分を憐まれての仰せであったかと体験の上で知らされるものだから」とも仰言った。先生が信念を語られて、悠々としてあせらず、悪あがきされず、淡々としていられたのには、このような法の不滅と普遍性を確信していられたからでありました。「信謗共に因となりて同じく往生浄土の縁を成ぜん」といわれた聖人の徳風の片鱗にふれる思いがいたします。

〈御案内〉

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半。一道会例会。南区駈上町二ノ八八市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル。

地下鉄が三月の末までには新瑞橋へまいります由、そこから徒歩で十五分程です。

○毎月二十四日。午前午後、昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　吉野穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社

振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七